

## 集落の森林と集落活動 - 公社造林地帯・川井村夏屋集落を例に -

菊池陽佑(岩大院農)・岡田秀二(岩大農)・岡田久仁子(岩手県立大総合政策)

### 課題と背景

岩手県において公社造林に期待をした地域は、2年3作の高標高での冷涼な畑作と短角牛の生産農家からなる地域であり、資本家的経営へと向上する展望のない地域である。一方、ここでは牧野組合を中心とする林野利用が長いこと地域を支えてきた。こうした条件があるからか、山村の活性化が叫ばれる中で、集落が再び自らの地域と活動の歴史を振り返り、集落を基本にした地域づくりの運動が出てきた。公社造林は、林野を介して集落の林業労働組織づくりと投資を継続してきたが、解体を余儀なくされる。地域における集落への注目は、森林経営と係わっては如何なる展開を見せるのか。

本報告では、そうした課題設定の前作業として、集落領域における森林の現状と集落活動の特徴を整理し、その関連についての糸口を探らうとする。

### 調査地の特徴

調査の対象地は、北上山系中央部に位置する川井村の夏屋集落である。そこには現在、49世帯、約140人が生活している。集落は、川沿いに農家が東西5.6kmに細長く点在しており、両側には急峻な山地が迫り、農地は川沿いに開かれた狭小な田畑と急傾斜の牧草地のみである。

### 分析

**川井村の森林・林業の特徴** 川井村では、林野利用のあり方が生活を大きく規定してきた。しかし、農林家の資本力の低さから森林経営の確立が望めない状況にあったため、林業公社を中心とした公的資本を導入し、そこに期待をかけた。しかし、その公社は平成19年4月をもって解散となる。地域論理が張り付いた公社経営部分が、県の経営へと移る。経営の内容は、まだ見えてこない。

**牧野組合** 川井村では、未だに短角牛の仔取り生産も農林家の生活を成り立たせる一つの方法である。そして、集落を基本に組織された牧野組合は、牧野への森林造成など森林のあり方にも大きく関わっている。

**夏屋集落と森林** 川井村の森林は国有-私有併存型であるが、夏屋集落には、国有林がなく、個人・林業公社・共有及び会社の森林が大半を占めている。集落は、これら森林経営の労働を担うと同時に経営そのものにも主体的に係わってきた。

**集落の森林経営** 集落の森林は、広葉樹が5割以上を占め、次いでアカマツ・カラマツ・スギなどの人工林となっている。集落にある共有林では、広葉樹伐採の繰り返ししてきたが、材の利用は枕木、製函、薪炭、パルプと変化してきた。依然として集落における森林は、生活していく上で欠かせないものとなっている。

**集落農林家の現状** 集落全戸49戸のうち水田農家は29戸であるが、兼業農家が多く自給自足の農業が主体で、年々農業就労労働の高齢化が進んでいる。主な農・林産物は、肉用牛、しいたけ、米、山菜加工品、リンドウ、舞茸などである。

**集落活動** 集落には、昭和57年に全戸加入で設立した「夏屋ろばた塾」(夏屋集会施設運営委員会)を中心に、中山間地域直接支払制度を活用した山菜加工品の生産販売、農地の維持管理、屋号看板の設置などに取り組んでいる。また、伝統ある夏屋鹿踊りの伝承活動や、冬期間高齢者宅の除雪、村外から地域づくり団体を招いての地元学を生かした地域づくりなど、様々な取組みを集落内で行っている。

### 今後の課題

夏屋地区では、農林業生産を中心に一層厳しい条件に立たされているが、村内外の多くの人々の協働による「木の博物館」の形成運動などとも呼応し、地域に伝わる生活様式の持続に向け、集落一丸となつての取組みをはじめた。こうした運動の延長に集落森林の経営問題が射程に入ってきた。村内集材工場の発展もあり、集落の森林との係わりに注目したい。

(連絡先: 菊池陽佑 a3206010@iwate-u.ac.jp)